

水戸から世界へ——。中国を経由し、世界とつながりを広げる三上建築事務所（水戸市）。3代目の益子一彦代表取締役所長（58卒）は「品格主義」と銘打ち、中国進出をてこにし世界へのアプローチを開始。市場の拡大を図り、将来への事務所経営を確かなものにしていく考えだ。地域に根を下ろしつつ、新しい領域や仕事に挑戦し続ける建築事務所のこれからについて、益子氏に話しかけた。

# 水戸から世界へ

上標二三事」一文

# 益子一彦氏に聞く

文●山口裕照(H10卒)  
日刊建設工業新聞社



福岡・行橋図書館「リブリオ行橋」  
外観(上・写真-1):(下・写真-2)

■水戸』といつ温室の中には居られ

創立71周年の2005年に、先代（二代目・三上清一氏）から事務所を引き継いだ。（先代に）もう少し面倒をみていただけるのかなと思っていたが、所長に就任して1年も経たないうちに入院され、亡くなってしまった。事務所の代表

いうことはなく、かろうじて名前を知つてゐる。それまではバイアスがかかった名前の知られ方をしている場合もある。以前は、『水戸』の三上建築事務所という定冠詞が付いていたが、今ではそれがほぼなくなつてゐる。逆に言えば、私たちは戸といふ温室の中に居られないということ。現在、図書館や学校など文教施設の設計競技はほぼ公募となつてゐる。ラーディングファームやゼネコン設計部と競合する際、多くの評価要素で勝ち目がない。そのため、私たちはラーディングファームやゼネコン設計部がやらないことをやっていく。同時に、下手でもいいのを他人のまねをしない。また、同じことを繰り返さない。この二つを所員に言い続けている。

競合相手がプロフェッサー・アーキテクトばかりということをあつたし、最近では私のひと世代下の人たちと、いうことも少くない。若い世代はある種の危なさがあるけど、思ひもしないものが飛び出してくるようなエキサイティングな展開がある。ラーディングファームとは総合力で競い、若い人たちとの競争はエネルギーの勝負になる。競つてはいるが、エネルギーの勝負は決して

インパクトが強くても良かっただかなと思った。

図書館と学校を数多く手掛けている。学校のメイン空間は教室だが、そこが思い出に残る、ライフィスティーに引っかかってくる空間とは言えない。教室でないところが、いわゆる「見せ場」の空間になっている。美術館や博物館、劇場なども学校と同じく、メインの空間が見せ場の空間ではない。一方、図書館はメインの空間が見せ場の空間になっている。特殊な建築であり、一様である必要はない、より多様性を持つてい。

いま図書館には危うさがある。オンラインやバーチャルの技術を活用すれば、オンサイトでなくても成立する。しかし二ズがないということと、供給元がないということでオンラインが成立している。図書館には本が集積し、知の象徴のようなイメージを、多くの方がまだまだ持っている。だがオンラインだからできることは何かということを、しつかりと教えていかなければ取り残される。リアルな空間をバーチャルな空間に置き換えるだけでは意味がない。オンラインの価値とは何かを見つけていくことが求められている。

**エンジニアリングをデザインする**

建築は若い人たちのために創つていくものだと考へてゐる。公共施設の場合、ワークショップを行うが、正面に言うと私より年配の方の意見は聞きたくない。30年先、50年先を見据えた時に、年配の方の意見が本当に正しいのか。どうも違うのではないかと思つてゐる。

## ■エンジニアリングをデザインする

建築は若い人たちのために創っていくものだと考へている。公共施設の場合、ワークショップを行ふが、正面に言うと私より年配の方の意見は聞きたくない。30年先、50年先を見据えた時に、年配の方の意見が本当に正しいのか。どうも違うのではないかと思つてゐる。



砺波市立砺波図書館 外観(上・写真-3)・内観(下・写真-4)

■ 「品格主義」世界に向けて発信

ことだと感じ、最近ではそれが簡単に見えたし、それにしても、デザイントエンジニアリングがうまくかみ合ことがある。学生時代、廣瀬（鎌一）先生の「SH-1」のすごさが分からなかった。でも30歳ぐらいになって、ようやくすごさが分かるようになった。

建築設計の実践とは、エンジニアリングや感情、経済、雑学などさまざまなことがクロスオーバーして、最終的に図面に落とし込んでいくことだと考えている。直感とかエモーションナルなものなども、最終的にはエンジニアリングに落とし込めなくては設計とは言えない。極めてシンプルに言えば、設計事務所は図面を書くところであり、図面がすべてということ。最近は図面を見る時、デザインというよりも、形に対してきちんと読み取れる寸法が入っているか、工程に合わせて創り出せる寸法になっているかどうか。こうしたところだけを見て終わっている感じだ。

きだと思ふ  
「綿密な計画」  
「誇りある  
動」「完全  
なる成果」「  
然とした建  
築」の四つ、  
キーワード。  
して、「品  
主義」を世  
に向けて發  
していく。



## 豊後高田市立図書館（写真-6）

かつて建築家とは「職能」だと言われてきた。しかし今では職能という人はほぼ皆無で、ビジネスや自己主張といった側面が強くなっている。倫理に基づいて行動するプロフェッショナルが、いま薄れていますと感じる。建築家の職能倫理については、先代だけでなく鬼頭（梓）先生の影響も受けている。しがらみのない自由を持った建築家でありたいし、建築家はやはり

戦略的には中国の発信力に乗つて、世界とつながっていくといふことに可能性を感じている。人口が1億数千万人の日本よりも、その10倍の規模となる中国を介することで、世界への発信力は確実に強まる。アンプになるということだ。日本からの発信だと、相当強力なメッセージを出していかなければ駄目だ。日本発というのは、私たちの力ではかなり難しい。

むしろ20代、30代の人たちがこの先を、より柔軟な思考でどう考へているのか。もっと若い高校生たちが、どのように先を見て、どう考へ、どうしてほしいのか。それにはもちろん稚拙さはあるものの、変なバイアスがかからず、ニユートラルに先を見ていく力を持つている。事務所の若い人たちがどういう視座で物事を見ているのか。それを見極めるのが今の私の仕事になってしまっている。

現在、事務所の平均年齢が40代前半で設計スタッフは30代半ばくらい。彼らがプロジェクトを引っ張っている。東京オフィス、九州オフィスを含めて総勢36人。意匠は私を抜かして22人で構造が3人、設備が1人といった体制を敷いている。エンジニアリングのチームと一緒に取り組んでるので、「リブリフォン橋」のツイストや「砺波市立砺波図書館（富山県砺波市）の大屋根など直感やひらめきを実現できる。振り返ってみると、私たちがやろうとしていることはエンジニアリングを「デザイン」しているという



学びの杜のいちカレード(写真-5)  
(野々市市立図書館／野々市市民学習センター)

主觀に対する共感の仕組み

## ■主観に対し共感いただけるか

プロジェクトの始動から約5年にわたり取り組んできた「リブリオ行橋」（福岡県行橋市図書館等複合施設）が、2020年2月に竣工した。敷地は川に面している方と、道路側とで別の顔を持っている。この変形敷地を初めて見た時、「ツイストということを思い付いた。それに論理的な根拠はなく、まさに直感的なものだ。今の時代は説明責任が求められる。民主主義には極めて重要なが、説明を果たせば個人の責任が免れるという面もある。

実は直感みたいなものは大事だと考えている。建築に限らず直感によって思いつくことは、いろんな人がさまざまなものを考え、何かを表現していくということ。それは客観ではなくて主観だ。それに対して、多くの人たちがどれだけ共感していくかということになる。今やっている仕事は私たちの主観に対して、共感をいただけるかどうかということだ。

リブリオ行橋では、上層と下層をどうツイストさせるかを考えていく中で、地域に残されている文脈をくみ上げ、ここでしかできない建築を創つていった。行橋の地は計画地前面を流れ長狭川の水運の発展によって、小倉藩最大の米の産地として城下町を支える在郷町だった。また反対側の計画地前面には旧百三十銀行行橋支店（現在の行橋赤レンガ館）が建っている。この赤レンガ館は辰野金吾が監修したとされており、当時の経済力の象徴ともいえる重要な建物だ。上層は長狭川、下層は赤レンガ館とそれぞれ正対している。完成してみると、もう少しインパクトが強くても良かつたかなと思った。

図書館と学校を数多く手掛けている。学校のメイン空間は教室だが、そこが思い出に残る、ライフヒストリーに引っかかるてくる空間とは言えない。教室でないところが、いわゆる「見せ場」の空間になっている。美術館や博物館、劇場なども学校館はメインの空間が見せ場の空間になっている。特殊な建築であり、一様である必要はなく、より多様性を持つていい。

いま図書館には危うさがある。オンラインやバーチャルの技術を活用すれば、オンラインでなくても成立する。しかし「バズがない」ということと、供給元がないということでオンラインサイトが成立している。図書館には本が集積し、知の象徴のようなイメージを、多くの方がまだまだ持っている。だがオンラインサイトだからできることは何かということを、しっかりと伝えていかなれば取り残される。リアルな空間をバーチャルな空間に置き換えるだけでは意味がない。オンラインの価値とは何かを見つけ出していくことが求められている。

品格があるべきだと思う。  
「綿密な計画」「  
誇りある行動」「完然た  
る成果」「毅然とした建  
築」の四つを

キーワードに

して、「品格  
主義」を世界

に向けて発信

していく。

マーケットを国内だけで考えていたら、今後、事務所の経営は成り立たなくなる。世界へのアプローチが必要だ。以前から生きているうちにアフリカまで行けたならと思っていた。建築は基本、発展途上のところに市場がある。2010年ごろ中国は発展途上の国だったが、今はや成熟社会となっている。

戦略的には中国の発信力に乗つて、世界とつながっていくということに可能性を感じている。人口が1億数千万人の日本よりも、その10倍の規模となる中国を介することで、世界への発信力は確実に強まる。アンプになるということだ。日本からの発信だと、相当強力なメッセージを出していかなければ駄目だ。日本発というのは、私たちの力ではかなり難しい。

昨年、中国人の広報担当のスタッフが入所したのをきっかけに、中国のサイトへのアピールを積極的に展開している。私が書いた日本語の文章を、広報担当が中国語に翻訳し、さらに英語にも訳して中国のサイトに掲載する。そうすると、世界中のサイトにつながっていく。中国を経由して増幅させると、アメリカ、ヨーロッパの国々などのサイトに引っかかってくる。このングタイプを問わず、声を掛けていただいている。

豊後高田市立図書館（写真・6）

# 女流ファイル Part 23

社会の多方面で活躍する女性卒業生を順次ご紹介しています。

## 高麗 夏実

(H28卒)

■ file-102 どいかに住む誰かの思い出の場所を創る仕事



KOMA Natsumi  
2016 東京都市大学 建築学科卒業(大橋研究室)  
2016 三上建築事務所 入所

私は木造の建築が元々好きだったこともあり、大橋先生の下で勉強をするため大橋研究室に入りました。意匠系の研究室ではありませんでしたが設計は続けていきたいと思い、堀場研究室のゼミに参加させて頂きながら卒業設計をやりました。設計を続けていく中、学年が上がるにつれ、課題となる建物の規模はどんどん大きくなり、大変さも増していく、このまま設計を続けていくのか何度も迷いました。

分岐点となったのは、ちょうど就職活動を始める直前に、ある方から「設計を続けること。一度辞

めてしまったら設計の世界には戻ってすることは出来ない。中途半端は意味がない、最後までやりきること。」と言って頂いたことでした。その言葉を受けて私は設計を仕事として続けることにしました。

三上建築事務所は茨城県の水戸に拠点をおく設計事務所です。東京と九州にも事務所があり、茨城県内に限らず、全国で設計・監理の仕事を行っています。

入所して1年目は茨城県内の小学校の設計を担当させて頂きました。想像していた何倍も大変で、先が全く見えない中、毎日ひたすら図面をかいていました。

設計の仕事は物件ごとに、敷地、規模、要求事項等、全く条件が異なり、毎回初めてのことばかりです。知らないこと、分からぬことばかりで、自信をなくすことも多いです。それでも続けていけるのは、大学時代に設計を続けていくことの大切さを色々な人たちから教えてもらったことが大きいと思います。

仕事を始めてから、所長や所員の方々から学んだことは、建築は一人では実現しないということです。設計だけでも、意匠、構造、電気、機械など多くの人達が一つの建物のために力を合わせます。そして、実際に施工してくださる施工者の方や職人さんの手で形にしていきます。全ての人が時間と労力をかけて建物を実現していきます。



パルシステム栃木センター[外観](担当物件)

パルシステム栃木センター[外観](担当物件)

今、私は木造の学校の監理を担当しています。自分が描いた図面を基に施工者の方に施工図をかいでもらい施工して頂いていますが、現場では多くの問題がおき、周りの方々に迷惑をかけてばかりの毎日です。ですが、焦らずに目の前の自分が出来る事をひとつひとつ丁寧にこなして頑張っていきたいと思います。

私がやりたいことは、今までこれからも「誰かの思い出の場所をつくること」です。三上建築事務所で創る主な建築は、実際の使い手が見えない場合や、日々変化していく場合が多い、学校や図書館などの文教施設です。どこかに住む誰かが「あの場所でこんなことがあったな。」と思い出してくれる場所をこれからも創っていきたいと思います。

(三上建築事務所)



「森の中の風と光の学校」



鉢田市立鉢田南小学校[内観]



「風をまとう格子」

パルシステム栃木センター[外観](担当物件)